

編 集 後 記

今年の日本生理学会は5月19日から盛岡で開催された。ゴールデンウィーク中には春本番の気候となり、そろそろ北海道もよい季節の到来かと思われたが、その後また寒い日が続き、ようやく夏らしい季節が始まったのは学会に出发する前日の5月18日であった。

本号は、総説4編、原著2編、調査1編、学位論文要旨4編、トピックス12編と、これまで発行された中でもっとも分厚い156頁となり、これも寄稿された諸先生方のご厚意によるものと感謝している。毎号これくらいの厚さがあると背表紙がよく見え、本そのものも立てかけることができ、編集委員長としては嬉しい限りである。私も歯学雑誌に寄与しようと、頑張って“味覚性発汗と顔面口腔領域の自律神経支配”というタイトルで総説を今号に寄稿した。これは講演を依頼されたことから、活字にも残しておきたいと思い執筆した次第である。どこかで誰かが読んでくれて参考にしていただければ幸甚である。

北海道医療大は、私立歯科大の中でも研究が盛んであり、教育にも非常に熱心なのになぜか学生が集まらない。今年度も定員割れとなった。ますますの教員の努力が必要なのは当然であるが、歯科に対する国策の間違いも大きな要因であろう。

今年から6年生の国家試験対策として必修・総論のテキスト作成が各教員によって行われている（5/31/2010締め切り）。少しでも学生の勉強に役に立つことを願っている。教員の努力を学生諸君も感じ取って頑張ってもらいたい。

4月から、大野先生が本学の副学長、平井先生が個体差医療科学センター長として退職後も医療大に勤務されることは本学部として喜ばしいことである。両先生には医療大発展のためにさらにご尽力いただき、みんなで歯学部を盛り上げていかなければならないと感じる今日この頃である。

政治の方では低空飛行が続いている。沖縄普天間問題は5月決着なのにすでに5月末となっても、まったく解決策が浮かなくてこない。日米安保そのものの討論をしないで移設問題だけを論じていても解決にはならないのは自明の理であることを国民は知っている。それなのにその話題を避けて通ろうとしているのが問題である。今後どのようなっていくのだろうか？政治は期待しないのが庶民の心得であろう。

宮崎県で家畜伝染病の口蹄疫（こうていえき）が蔓延している。何十万頭の牛・ブタが処分されている。これなどは一度対応が遅れると大惨事になってしまう。早く収束してもらいたいものである。

6月からは4年に一度のワールドカップが南アフリカで始まる。6/14はカメルーン、6/19はオランダ、6/25はデンマーク戦である。良くて引き分け1つで勝ち点1が順当な実力と思われるが、番狂わせでも起こり1勝2引き分けで1次リーグを突破できたら嬉しいことである。今号の発刊予定が6月31日なので、発刊される頃には結果がでている。岡田ジャパンは出発前の試合でセルビア、韓国に完敗だった。誰がどうやってもそう変わりはないと思うが、成績がふるわないと監督のせいにされるから、監督は気の毒な役回りである。日本代表には誰でもなれるわけでないのだから、監督や選手は命がけで頑張ってもらいたいものである。

大和魂で日本中のみんな、頑張りましょう！

（追記）ワールドカップサッカーは6月25日にデンマークに勝ち、嬉しい誤算で一次リーグ突破が決まりました（二勝一敗）。29日はパラグアイ戦と決勝トーナメントの1回戦です。こちらも是非突破してもらいたいものです。

平成22年5月31日
編集長 和泉博之

次号（第29巻、第2号）の発行は平成22年12月31日です。

会員各位の投稿原稿募集の締め切りは平成22年9月30日必着と致します。期日厳守の上、ご投稿をお願いします。本誌投稿規定（2010年第29巻、第1号の巻末あるいは歯学部生理学教室のホームページ；<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~physiol/>）をご参照の上、投稿してください。